

CAPNA

キャプナニュースレター48号

安倍内閣が誕生し、改憲や教育改革の流れが加速しそうな雲行きです。
 「美しい国」のメッセージや、若者たちへの「再チャレンジ」の呼びかけは、耳心地がいいけれど、「子育て」という国の根幹にかかわる問題に、新総理はどの程度、真剣に取り組む心構えがあるのでしょうか。
 弱い人の問題が置き去りにされないように、市民団体が政治をきちんと見つめ、提言や情報を発信していかなければと思います。
 今回のニュースレターは、アメリカ・オレゴン州の家庭支援をレポートします。

48

誕生「ブーさんの家」



シェルター支援を始めました

CAPNAは、虐待を受けた子どもたちや親に対する支援活動を続けてきました。しかし、子どもを保護したくても、児童相談所の一時保護所は満杯状態で保護のチャンスが難しいケースがしばしばありました。また、子どもの虐待と母親へのDV(ドメスティック・バイオレンス)が重複している場合は、母親と子どもが別々の場所に保護され、その後の支援に困難を招いているのが現状です。

そこでCAPNAは虐待を受けている子どもと母親と一緒に緊急避難として一時的に利用できるシェルター設置を数年前から模索してきました。今年7月によりやくシェルターが完成しました。シェルターの名前は「ブーさんの家」です。暴力のない安全で安心できる場所として名付けました。「ブーさんの哲学」という題名の本もでていますが、ミッキー・マウスなどのアニメと異なり、ブーさんのお話には暴力は一切出てこないことにお気づきでしょうか。「ブーさんの家」はすでに一組の母子が3週間滞在し、シェルター支援員による日々の手厚い支援を受けて、子どもも母親も元気に退所されました。CAPNAはシェルターという場所を提供するだけでなく、質の高い支援員のケアも受けることができます。母子に対して援助者と家庭支援員による傾聴が中心の援助と日常生活支援を行います。

ニュースレターには今後「ブーさんの家便り」を掲載させて戴き、活動についてご報告させて戴きます。みなさまのご支援をよろしくお願いします。(理事長 岩城正光)

◆ シェルター支援ネットワーク委員会より

9月22日にシェルター支援ネットワーク委員会が開かれました。シェルター支援・運営事業の課題を把握し、検討をすること、シェルター事業の進捗状況を管理することを目的とした委員会です。愛知県女性相談センター、愛知県中央児童・障害者相談センター、名古屋市児童福祉センター、名古屋市男女平等参画推進センター、愛知県弁護士会の代表者と大学教員の方、計7名にご参加していただきました。

CAPNA と公的機関の連携協力を確認する会議となりました。次回は来年1月頃を予定しています。

ご寄付

次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。
 (8-9月分、順不同、敬称略)

- 【団体】 匿名1社
- 【個人】 木下 寛、柴田奈緒美、鳥居かおり、廣瀬治代、萬屋育子、田中善美、矢満田篤二、柿本里佳、向山富雄、堀内久美子、井上直美、山口志津代、七篠昌之 他、匿名希望2名

CAPNAニュースレター48号 (隔月刊32号)

2006年10月18日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち
 編集 CAPNA事務局広報チーム
 事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

オレゴンに学ぶ家庭支援



米国オレゴン州の児童虐待・ネグレクト予防プログラム「ヘルシースタート(健康な出発)」の家庭支援技術を学ぶ研修ツアーが9月11日～15日に行われ、CAPNA関係者5人を含む17人の女性が参加しました。職種は児童福祉司、大学教員、保健師、助産師、NPO関係者、保育士、新聞記者などでした。日本が、家庭支援のあり方に試行錯誤する中、参考になりそうなポイントをまとめてみます。(上野美子)

早期の支援は「節約」になる

CAPNAは4月に「愛着の絆づくりを考える 育児支援プログラム 専門講座Ⅱ」として、オレゴン州のヘルシースタートプログラムのコーディネーターであるカレン・ヴァン・タッセルさんとヘネシー澄子さん(東京福祉大学名誉教授)をお招きし、訪問支援についての講座を行いました。とても中身の濃い講座でした。それがきっかけとなって、今回のツアーが実現しました。

ヘルシースタートの特色は、赤ちゃんがおなかの中にいるうちから親の育児不安などの危険性をつかみ、支援を始めることです。

最初の妊娠をした女性は産婦人科の医師からヘルシースタートについての説明を受け、サービスを受けたいと望んだ妊婦には支援スタッフが面会します。そしてアンケートに答えてもらい、育児への意欲、精神状態などを探って、リスクを把握します。

なぜ、妊娠中から支援が必要なのでしょう。

赤ちゃんは子育てのマニュアルを持って生まれてくるわけではなく、新しい親はさまざまな援助を求めています。親子の愛着の絆をつむいでいく作業は妊娠中から始まっているので、出産前からの支援が有効だといえます。タッセルさんは「早期の予防に費やす1ドルは、後で4ドル以上の節約になる」と、その意義を強調しました。

そして産婦人科との連携を通して「対象人数を絞る」という点も重要です。

出産後の問題が予想され、サービスを受けたいと同意した人を対象にしているから、スタッフと良い関係を築きながら、手厚く支えていくことができるのだといえます。

同州のヘルシースタートは1993年から試験的に始まり、2001年に全州に拡大。各郡ごとにNPOが州や連邦政府からの補助金を受け、サービスを運営しています。こうした行政とNPOの連携のあり方も、日本の将来のモデルになると感じました。

私たちの班の通訳をしてくださったドウテン・富子さんは子ども二人を持つ美しい日本人女性です。彼女も最初の妊娠・出産のときにヘルシーサポートサービスを受けた経験がありました。アメリカにきた直後だったこともあって何も分からない中で、ニーナという若い女性



富子さんと家族

スタッフがサポートしてくれたそうです。

「ニーナは私より若いのに、いつも、また来て欲しいと思えるサポートをしてくれました。私が些細なことで心配していると、心配ないよと慰め、勇気づけてくれました。安心して子育てができたのはニーナのおかげです。彼女のおかげで子育てを楽しみ、元気も出てきました」と話し、今は州の諮問委員会に協力をしています。富子さんのお話はとても心に響き、みんな涙ぐんでいました。

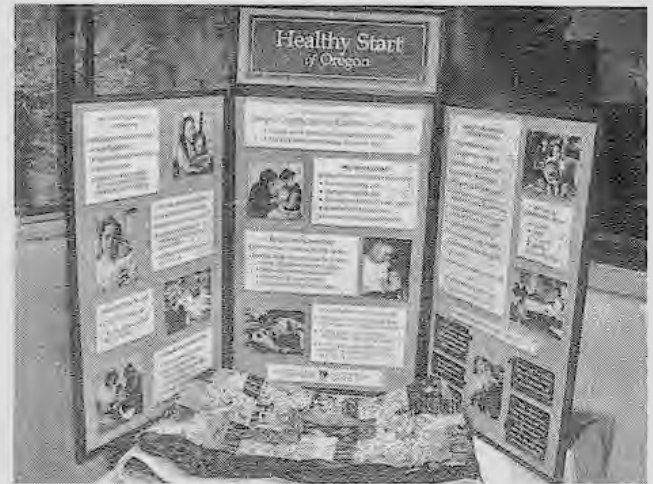
ヘルシーサポートの研修を受け、最も興味を持ったのは、訪問スタッフの研修とそのやり方でした。まず1週間のトレーニングを受け、スタッフになってからも、週2時間のスーパービジョンを受けているそうです。初めての訪問の際にはメモやノートは取らず、利用者との会話の中から状況を把握します。そして、事務所に帰ってから一つ一つの項目について必要度が高いか低いかを検討し、スコア化して訪問回数を決めるというやり方が確立しています。アセスメント表も使いやすくできているようでした。これらを使えば、適切なレベルで、誰もが使えるように思いました。フルタイムスタッフは概ね25件のケースを受け持ちます。

日本でも、厚生労働省が「こんにちは赤ちゃん」事業を行うと発表したばかりです。

日本でも訪問支援が始まるということは、喜ばしいことですが、どのような訪問をするかということが大切です。富子さんが体験したような「また来てほしい」と思える訪問ができるように、人材育成、それをバックアップする社会資源の充実が求められています。



参加メンバーは元気がいっぱいなの女性たち



ヘルシースタートの活動紹介コーナー

ヘルシースタートは「健康な家族アメリカ」(HFA)が作成した「成功する家庭訪問のための12の重大原理」にもとづいています。HFAは全米35州とカナダなどで支援プログラムを展開している団体です。最後に、その12項目をまとめておきます。

1. 誕生の前、または誕生時にサービスを開始する
2. 最も支援を必要とする家族を発見するために標準化された評価方式を用いる。親の孤立、薬物乱用、被虐待歴などさまざまな要素の有無をみることができるものであること
3. 強制ではなく親の自由意志でサービスを受けるように、家族と信頼関係を築けるように肯定的で、辛抱強い働きかけをする
4. サービスは集中的に、一貫した基準に沿って訪問の回数を増減し、長期間行う
5. サービスは文化に沿って行う。訪問家庭の文化的相違を理解し、認識し、尊敬する
6. サービスの焦点を子どもの発達、親子の相互作用だけでなく、両親の支援にも置き置く
7. 家族全員の健康と発達を確保する医療サービス、地域サービスと連携する
8. スタッフの担当ケースを制限し、各家族のさまざまなニーズに対して、十分な時間を持てるようにする
9. スタッフの採用は、個人的な判断ではなく、意欲、技術、能力に基づいて決める
10. 家族と一緒にさまざまな状況処理できるように教育と経験のあるスタッフを選ぶ
11. スタッフには家族評価・家庭訪問について十分な研修、訓練の機会を与える
12. スタッフは継続的で有効なスーパーヴィジョンを受け、家族のエンパワメントの方法を見つめ直したり、自分の思いを表現する必要がある